

機関番号：34106

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21792347

研究課題名（和文） 産業看護ケア評価ツールの開発に関するアクション・リサーチ

研究課題名（英文） Development of Evaluation tools for Occupational Health Nursing by Action Research

研究代表者

高橋 悦子（TAKAHASHI ETSUKO）

四日市看護医療大学・看護学部・助教

研究者番号：00435554

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、産業看護ケアを評価する指標を開発することである。産業看護職、産業看護ケアの対象者である事業主・労働者へのインタビュー調査を実施した結果、産業看護職への期待、必要としているサポートが明らかとなった。インタビュー結果をもとに、産業看護ケアの評価指標を開発した。さらに、事例検討を通じて、産業看護ケア評価ツールを活用したケア評価を実施した。今回作成した評価ツールは、他職種や事業主など産業看護職以外の人々が質の高い産業看護ケアが提供できているかを客観的に把握することを促進するツールであることが確認された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop of evaluation tool for occupational health nursing care. The item pool of the evaluation tools was developed based on interview survey conducted on the staff members of occupational health team and employees/employers. We developed evaluation tools by selecting items from the pool. Furthermore, we carried out evaluation by case studies with the evaluation tools we developed. It was confirmed that the evaluation tools which we developed was significant and practically. And it was suggested that this tools promoting understanding about the quality of occupational health nursing care for other occupational health staff members and workers.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：看護学，産業看護，アクション・リサーチ，看護ケアの評価，看護ケアの質

1. 研究開始当初の背景

急速な技術革新や産業構造の変化、就労形

態の多様化、能力・成果主義の導入など、近年、我が国の産業社会は大きな変革期が訪れ

ている。このような社会背景の中で、過重労働、メンタルヘルス不調、中高年齢層の自殺者増加、生活習慣病の増加など、働く人々の健康問題は深刻さを増し、心身の健康状態を保持・増進するための方策を検討することは喫緊の課題である。

働く人々の健康支援を行う産業保健の場では、従来から行われてきた職業性疾病に対する予防活動だけでなく、前述のような社会背景の変化を受けた労働者の心身両面にわたる健康づくりや QOL 向上のための健康支援活動にも力点がかけられるようになり、これに関して産業看護職の重要性が注目されている。

労働者がいきいきとやりがいをもって働き、QOL が向上するような職業生活を送るためには、産業看護職がこれまで以上にその役割を発揮する必要がある。そのために、労働者にとってどのような健康支援が必要であるかを明確にし、より質の高い産業看護ケアの実践にむけて、産業看護ケアを評価するためのシステムづくりが必要であると考へ、本研究の着想に至った。

看護ケアの質的な評価に関する研究は、医療安全対策が喫緊の課題となり、専門看護師による高度な実践活動が評価されるようになった近年、国内外において数多く実施されている。その内容は質的記述研究やアンケート調査による本人評価、他者評価など様々な視点からの研究がなされており、看護ケアの質向上のためのシステム開発と併せ、積極的に研究が展開されている。しかし、産業看護分野は、看護学の中でも比較的新しい学問分野であるため、調査研究活動は不十分であり、実践レベルでの産業看護活動や産業看護の役割に関する実態調査は行われているが、産業看護ケアの質評価に関する研究はほとんど行われていない。

研究代表者は、産業看護ケアの体系化に向け、産業看護診断体系の検討に関する研究会に参加し、現在も継続してこの研究テーマに取り組んでいる。この検討過程で、同じ看護の理念に基づいたケアを展開しつつも、いわゆる臨床看護とは違った視点を持って対象を支援する産業看護の専門性について考えるに至った。また、産業看護ケアの質を向上するためには、その質を構成する要素を明らかにすることが重要であると考えた。

これらの点をふまえ、臨床看護で使用されている評価ツールとは違った視点を含めた産業看護独自の質評価の仕組みが必要であると感じ、産業看護ケアを評価するための評価指標を開発することを目的とした本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、質の高い産業看護ケアを実践するために、産業看護ケアを評価する評価ツールの開発とそのツールを活用した評価-改善のサイクルが効果的に稼働する評価システムの構築を全体構想としている。

今回は、ドナベディアンモデルの質評価の枠組みを用い、構造、過程、結果の3つの側面から産業看護ケアを評価する評価指標を開発し、広く活用できるように標準化することを目的とする。

3. 研究の方法

平成21年度は、産業看護ケアの構造化と評価指標となる項目を検討するために下記の方法で調査を行った。

(1) 産業看護ケアの構造化のための文献レビュー

国内外の産業看護関連の文献レビューを行った。産業看護職の役割や機能など、産業看護の本質論について論じている論文を中心に、文献レビューを行い、産業看護ケアの

あり方を把握し、産業看護ケアを構造化するための基礎資料とした。

(2) ヒアリング調査

インタビューガイドに沿った1時間30分程度の半構成的面接にて実施した。

① ケアの受け手である働く人々（事業主・労働者）へのニーズ調査

産業看護職への期待、必要としているサポート、実際に役立った看護ケアなどについてグループ・インタビューを実施する。ケアの受け手側からの産業看護に対するニーズを明確にした。

② ケア提供者である産業看護職への質の高い産業看護ケアに関するインタビュー

エキスパートレベルの産業看護職を対象に看護ケアを評価する視点は何かを明確にするために、自身が考える質の高い産業看護ケアとは何か、それを実践するためにどのような点に配慮しているかなどを中心にインタビューを実施した。

平成22年度は、産業看護ケアを評価するための指標項目を検討した。

(3) グループ・ディスカッションによる指標項目の検討

平成21年度の研究結果をもとに、構造、過程、結果の3つの側面から産業看護ケアの質の評価指標を分類、構造化を試みた。この検討は、ケアの受け手である働く人々とのグループ・ディスカッションとエキスパートレベルの産業看護職とのグループ・ディスカッションを並行して定期的に行い、指標項目の検討を実施した。

データの分析ならびに分類、構造化は、エキスパートレベルの産業看護職、産業看護の実践・研究・教育経験のある研究者によって実施され、解釈の乖離の有無、分類の基準、

適合性などについて検討を重ね、共通見解が得られるまで繰り返し分析を行った。

(4) 産業看護ケアの評価に関する調査

グループ・ディスカッションに参加している事業場に、事例検討を通じた調査に関する協力依頼を行い、調査を実施した。それぞれの事業場で実践している産業看護ケアについて、構造指標、過程指標、結果指標の3つの側面からケアの質を評価した。

4. 研究成果

(1) 文献レビューによる知見の整理

産業看護の本質論について論じている論文を中心に、文献レビューを行い、産業看護職の役割や機能など、知見を整理した。産業看護職は、労働安全衛生法の中で法制化されている産業保健スタッフではないため、法律で定義されている役割や機能は持たない。逆に法律に縛られない分、比較的自由的な枠組みの中で実践を行っていた。その中でも、看護の理念に基づき、対象である働く人々、ならびに対象職場(集団)、事業場(組織)の自助努力を促しつつ、側面から職場における健康を支援する専門職であることが共通の特徴として見出された。

(2) インタビュー調査による質の高い産業看護ケアの抽出

産業看護職、産業看護ケアの対象者である事業主・労働者へのインタビュー調査を実施した結果、産業看護職への期待、必要としているサポートについて明らかとなった。

両者ともに共通している産業看護職への期待は、企業の一員である立場と看護専門職あるいは産業保健専門職としての立場を両立し、バランスのとれたアプローチを行うことであった。特に、事業主からは企業の生産性に貢献していく産業看護職の姿を明確に

打ち出していくことに期待を寄せる意見が挙がった。また、看護職の中では、産業保健チームの一員としての協働作業の中で、働く人々の健康支援を実施していくこと、産業保健チームの中の産業看護職自身の立ち位置を流動的に見極めながら、常に対象である働く人々が中心となれるように支援の形態を変化させる必要性が挙げられた。

(3) グループディスカッションによる質評価の項目の検討

これらのインタビュー結果をもとに、インタビュー対象者と研究者が参加するグループディスカッションを5回開催し、ドナベディアンモデルの質評価の枠組みを用い、構造・過程・結果の3つの側面から産業看護ケアの評価指標の分類、整理を試みた。3つの側面の具体的な内容として、1)質の高い産業看護ケアを提供する場を表す「構造指標」、2)質の高い看護ケアを提供していることを示す「過程指標」、3)質の高い看護ケアの結果として対象に現れる「結果指標」に関する指標項目が挙げられた。

(4) グループフォーカス・インタビューによる産業看護ケア評価指標の検討

質評価項目を検討するグループディスカッションに引き続き、グループフォーカス・インタビューを継続的に開催した。グループフォーカス。インタビューでは、産業看護ケアを評価する指標項目の検討とグループに参加した産業看護職から提供された事例検討を通じて、産業看護ケア評価ツールを活用したケア評価を実施した。事業主や衛生管理者から、産業看護職による健康支援が、職場での産業保健活動のあらゆる機会を利用して、信頼関係を構築しつつ、相手のニーズに合わせて変化していることが理解しやすいと

の意見を得ることができた。今回作成した評価ツールにより、多職種や事業主など産業看護職以外の人々が質の高い産業看護ケアが提供できているかを客観的に把握することを促進するツールであることが確認された。

産業看護職は法制化されていないため所属する企業の規模や職種、雇用主や会社方針など様々な要因により、果たすべき役割や期待が大きく異なる。そのため、本研究で得られた知見は研究協力していただいた事業場や産業看護職にあてはまるもので、当初の目的としていたケア評価の標準化は困難であった。今後は、さらに対象を広げ同じ手法で質の高い産業看護ケアを追及していくことも必要とされる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 高橋悦子、参加型改善活動の展開と普及に向けて、労働の科学 2009;64(10): 38-42 (無)
- ② 高橋悦子、後藤由紀、河野啓子.わが国における産業看護研究の現状と課題 1996~2008年に看護専門職により発表された論文の検討を通して.四日市看護医療大学紀要 2009; 2(1): 129-137. (有)

[学会発表] (計3件)

- ① 高橋悦子, Evaluation of mental health care activities at workplaces focused on small and medium-sized enterprises in Yokkaichi City, The Joint Conference of The 3rd International Occupational Health Nursing and The 2nd Asia Occupational Health Nursing, 2010年8月7日, ワークピア横浜 (横

浜市)

- ② 高橋悦子, Characteristics of Health Promotion Activities in Small and Medium-sized, The 20th Korea · Japan · China Joint conference on Occupational Health, 2009年8月28日, 韓国ソウル市
- ③ 高橋悦子、産業看護診断体系の検討—個人に対する産業看護ケアラベラー、第82回日本産業衛生学会、2009年5月22日、福岡国際会議場（福岡県）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 悦子 (TAKAHASHI ETSUKO)
四日市看護医療大学・看護学部・助教
研究者番号：00435554

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし